

1. 教育の責任

「教育の理念」で述べる日本史メジャーの学びの目標にむけて、客観的歴史認識を深め、論理的思考力と実証的問題究明の態度を身につけるべく下記の科目を担当している。

「日本中世史講義」(講義、日本史メジャー選択必修科目、春学期、2単位、63名)

「南北朝～戦国時代論」(講義、日本史メジャー選択必修科目、春学期、2単位、28名)

「ゼミナールⅠ (国際日本学部)」(演習、総合研究科目、春学期、2単位、17名)

「日本中世史基礎演習」(演習、日本史メジャー選択必修科目、秋学期、2単位、28名)

「日本史特殊研究」(演習、日本史メジャー選択必修科目、秋学期、2単位、21名)

「ゼミナールⅡ (国際日本学部)」(演習、総合研究科目、秋学期、2単位、17名)

「卒業研究」(国際日本学部)」(演習、総合研究科目、春・秋学期、4単位、19名)

2. 教育の理念

本学史学コース、特に日本史メジャーにおいては、その専門研究および教育を通じて、一国的発想にとどまるのではなく、日本という視点から世界を見通せる社会人を養成するという発想をもって歴史認識を深める学問的態度を身につけることを理念としている。これは、本学学則第1条に定める「豊かな教養と専門的学術、旺盛な自己開発精神、優れた国際感覚及び問題解決能力を備えた人材を育成する」という本学の教育理念に合致するものである。

本国際日本学部は、この理念にもとづき、学則第3条の3において、「人類が創造してきた文化的行為を教育研究の対象とし、学修活動の中で、文化についての深い洞察力と高い教養を身につけ、異文化に対しても広い視野をもって尊重し理解することのできる教養豊かな人材養成を目的とする」とその教育目的を定めている。日本史メジャーにおいても、このような教育目的・目標を共有している。歴史学の一部としての日本史学は、研究対象についてそれと同時代に作成された、古文書をはじめその他様々な原史料にもとづいて研究することを旨としている。原史料に常に基づくことによって、そうした同時代に作成されたものがいかに重要なものか、失ってはならないものかを知る。このことを通じて、文化財を保存することの意義、および現代を生きるものにとってその保存が社会的責務であることを学ぶ。また、その原史料は、これを可能な限り多くあたることによって、より広く深く、またより正確な史実をあきらかにすることが出来る。それは、日本国内で、あるいは日本語で記されたものとどまらない。世界中に残された原史料を広くあたる態度は、異なる文化間の相互理解の必要性を、これを学ぶ者の心に深く刻むものである。原史料をもとに学び、そして文化財保存の重要性や様々な文化に対する理解を深めつつ、歴史認識をあらたにしてゆく。これが本学の教育理念から発出した日本史メジャーの教育目的であり目標である。

3. 教育の方法

国際日本学部のディプロマ・ポリシーは、「日本および世界の多様な歴史、言語、文化、文学、国際関係に対し、尊重、理解、受容を試みることで幅広い視野と教養を持つとともに、専攻領域における専門的能力を修得している」、「国際社会や地域社会で発生する諸問題に対して、高い問題解決能力を備え、持続可能な社会の確立に寄与すべく多様な人びとと協働して課題に取り組むことができる」、「学修によって修得した英語、日本語での思考基盤能力、行動基盤能力、社会的基盤能力を発揮できる」との要件を満たすものに、学位を授与するものとしている。

本学日本史メジャーでは、レベルナンバー100(入門相当科目)に「日本史の扉」を、以下、レベルナンバー200(基礎相当科目)として各時代の概説にあたる講義科目(「日本中世史講義」など)や基礎的な原史料の取り扱いを学ぶ基礎演習科目(「日本中世史基礎演習」など)を、また「日本近代の都市」などの選択科目を、レベルナンバー300(応用相当科目)には、「日本史特殊講義」および「日本史特殊研究」、また各時代ごとの特論(「南北朝～戦国時代論」や「江戸時代論」、「二つの大戦と日本社会」など)を、レベルナンバー400(発展相当科目)に「日本史総合講義」および「日本史総合研究」といった科目をそれぞれ配置し、学生が段階ごとに講義と原史料を用いた演習系科目を組み合わせて履修することによって、学部の定めるカリキュラムポリシーが実現できるよう、教育カリキュラムが組まれている。また、ここには同時に「古文書学入門」、「古文書演習入門」、および「古文書演習応用」の科

ティーチング・ポートフォリオ

大学名：大手前大学 所属：国際日本学部 名前：石畑 匡基 作成日：2023年12月12日

目もおかれ、原史料に基づいた学びがより深められるようになっている。

当該教員（石畑）は、このカリキュラムの中で、200 科目の「日本中世史講義」、および「日本中世史基礎演習」を、また 300 科目では、「南北朝～戦国時代論」「日本史特殊研究」を担当している。また、これらメジャー科目と同時に 3 年生向けの「ゼミナール I・II」をも担当し、次年度（4 年次）の「卒業研究」まで持ち上がりで二年間、学生の研究指導に当たることとなっている。

（1）授業実践の工夫

2023 年度の担当科目について、対面・非対面の別は以下の通りである。

「日本中世史講義」 対面

「ゼミナール I（国際日本学部）」 対面

「南北朝～戦国時代論」 対面

「日本中世史基礎演習」 対面

「日本史特殊研究」 対面

「ゼミナール II（国際日本学部）」 対面

「卒業研究」 対面

新型コロナウイルス感染症流行が落ち着き本年度は対面形式となった。

授業では、レジュメと PPT を併用することで資料の写真を積極的に見せるようにつとめた。

（2）総合的な学修成果達成のための工夫

授業内容の予習を促すために、事前にエルキャンパスにレジュメを掲げて、熟読したうえで授業に参加するように促した。

授業内容の定着を促すために、授業の復習課題を掲げて、次回講義のその解説をすることで授業内容の復習につとめた。

授業内容をより深めるために、ゼミ遠足として大阪城や堺市博物館に学生を引率した。

学生の興味関心を引き出すために、NHK 大河ドラマの主人公である徳川家康を取り上げたほか、映画を見ながら、その描写と近年の研究成果との違いなどに関して説明を加えた。

応用科目に相当するレベル 300 の「日本史特殊研究」では、グループごとに担当資料を決めて、グループで調べた内容を報告させた。

日本史メジャーでは、最終的にゼミナールおよび卒業研究で卒業論文を作成することを課すが、実証史学においては、論文を書く際に、その論文の最小単位を構成すると言ってよい、個々の史料を、原稿に引用し、その内容を説明し、その説明をもとに解釈するという一連の作業をおこない、これを繰り返して全体として自説を論証するという過程を経る。この作業を、ゼミナールや日本史特殊研究の報告によって身につけさせた。

4. 教育の成果

2023 年度春学期のアンケート結果はいずれの科目も平均並みであり、もう少し学生の興味を引きつけるように努力したい。

5. 改善への努力と今後の目標

日本史学の研究は近年急激に進んでいる。日本中世史の領域は、史料の新たな発見や、それに伴う歴史的事実の捉え直しが続いており進展が著しい。これに合わせ、講義内容も学会の研究水準に後れを取らないようにしたい。

今後もコロナウイルスの関係で授業や試験に出席できない学生も出てくるのが予想されるため、el-Campus を上手く活用しながら学生の不利益にならないよう取り組んでいきたい。

NHK 大河ドラマの主人公である徳川家康を授業で取り扱うなどして、学生の興味関心を引き出す努力を続けていきたい。

ティーチング・ポートフォリオ

大学名：大手前大学 所属：国際日本学部 名前：石畑 匡基 作成日：2023年12月12日

【添付資料】

特になし。